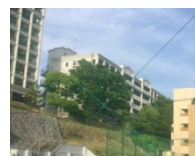


むかし「追分」いま「星ヶ丘」

名古屋市千種区星ヶ丘に住んで20年余り。小林完『猪高村物語』1988年を読んで、写真下の自宅（「野越峠」あたりのうえに立つUR6階）周辺のことを知ったことも多い。「さわり」のところを紹介したい。



昭和14年(1939)の3月下旬のある日、当時9歳の私は子ども用自転車で、千種区の本山付近を走っていました。私のすぐ前には、高針の「新屋敷」出身のGさんが、やはり自転車を走らせていました



2年前に東山動植物園が開園し、覚王山から市電が延長され、車道もその時に舗装されていました。しかし現在とちがって、通行する自動車はほとんどありませんでした。リヤカーを引いて肥汲みに行く人たちや、岩木(亜炭)を積んだ荷馬車が、向うからゆっくりとやって来ました。東山公園の前はにぎやかでした。大勢の人々が市電を降りて、動物園の方へ歩いていました。東方の村々から自転車でやってきた人たちが、ここで折り返す市電を待っていました。市電の終点から東は舗装が切れて、道幅の狭い石ころだらけの上り坂になっていました。

Gさんと私は自転車を引きながら、歩いて坂を上りました。「一ノ嶺坂というんだ。肥汲みの帰りにこの坂を上るのはえらいんだよ。でも坂の上から新池を眺めると、ほっとするねえ」とGさん。新池は予想よりも広く、水は青く澄んできれいでした。私たちは池を左手に見ながら、樹間の屈曲した道を進みました。

Gさんと私は、採ったつくしを自転車の付けた籠に入れて「追分」にさしかかりました。高針と一社への分岐点です。当時は松や竹が狭い道の両側から生い被さり、昼間でも暗く、北側に草ぶきの茶店が一軒あるだけでした。Gさんは自転車を降りて、右手の坂を上り始めました。「また上るの？」と少々疲れた私。「もう少しで野越峠だ。峠から先は下りで楽だよ」野越峠は切通しになっていました。両側は赤土の崖がむき出しで、その上には松が茂っていました。トロッコの線路が道の端を東の方に伸びて、崖の一部が掘られていました。「ここが名古屋市と猪高村の境だ。ここから東は高針になる。今工事をして道を掘り下げているだろう。昔はもっと道幅が狭くて、峠も高かった。だんだん楽になるよ」とGさんは説明しました。

野越峠は「乗越峠」のことです。高針の人たちは名古屋へ出るのに、必ずこの分水嶺を越えねばなりません。高針の「西山」の人々は、出征兵士を部落総出でこの峠まで見送り、村に来る花嫁をここまで出迎えました。明治以来この峠道は、何度も改修されました。

(2017年6月18日)